



遺跡・遺産の経験と意味

Our Experiences and Meanings
with Archaeological Sites and Cultural Heritage

平澤 毅 (奈良文化財研究所)

HIRASAWA, Tsuyoshi (Nara National Research Institute for Cultural Properties)

1. マヤ暦をめぐる騒ぎから

マヤ暦に絡む様々な騒動は、その後、どうなったであろうか。改めてWeb上で参照してみると、全世界であれだけエネルギーを費やしたこの話題に関するフォローは寂しいものである。一説に、計算方法に誤りがあって実は2012年12月21日¹⁾ではなく2015年9月3日である²⁾とする書き込みもあるが、取り敢えず少し先のせいもあってか、すでに反応は薄い。もう少し詳しく確認してみると、2011年10月28日との解釈もあったようで、いまだ人類滅亡の直接的兆しを世界中で確かに共有していないし、単純な事実として現に滅亡していないのだから騒ぎの根本の真偽を確認するのは難しい。

急速な技術革新とともに1990年代以降において複雑に、そして、もはや誰もその全容を把握することができないほどに発展してきた情報網³⁾の中で、いつでも身につけて置くのが容易なスマートフォンやタブレット端末が広く深く普及し、それによって媒介されるSNS (Social Networking Service) などは、今日、私たちの文明生活の一部として、多くの人々に欠かせないものとまでなりつつある。その一方で、私たちの世界に対する理解はむしろ新たな混沌へと投げ込まれ、様々にもたらされる情報や情報源への反応は、いつでも想定外を含んだ状況にある。様々なネット犯罪にも強調されるように、もはやそれらの情報の動態は、その真偽とはむしろ無縁であっても支配的な影響力さえ持っている。ここ暫くハリウッド映画⁴⁾の注目主題のひとつでもあるリアルとバーチャルの境界消滅も現実のものとなりつつあるわけである。

そうした中で、件のマヤ暦を巡るとても“一連”とは言えない騒ぎに横たわっているのは、大方、マヤ暦に関する正しい解釈などに関する問題ではないと思われる。なぜなら、私たちはすでに、私たちが「マヤ文明」と呼んでいるその文化の只中にはないのは明らかであるし、さらに例えば、古代マヤの人々がグローバル化著しい今日の世界に暮らす私たちのことを慮っていたなどと考えるのは、あまりにも超常的に過ぎるではないか⁵⁾。

いったい人々はこの事態に何を期待していたのだろうか。

2. 命題の在り処を探る

例によって、またしても冒頭からおかしな話が出てきたということになるかも知れない。しかし、マヤ暦をめぐる騒ぎの素は、遺跡・遺産から得られた情報、あるいは、得られたと思われている情報に対する様々な解釈に基づく種々の反応であるということを、改めてここで強調して確認しておきたい。そして、その多くは、いわゆる遺跡・遺産の一般的な保護スキームによって見出される内容や価値とはかけ離れているものであったであろう。

人類の滅亡、あるいは、世界の終わりという強烈な解釈の背景には、漠然とした社会不安が世界中に広がっているということがあるとしても、その解釈の根拠の多くは、確たるものというよりも、変質を伴うイメージの爆発的な拡散によるものではなかったか。この度の滅亡騒ぎにとんでもなく動揺した人々の多くにおいて、マヤ暦の意図するところを自ら緻密に確認していると想像するのは難しい。中には、自らの漠然とした不安を表現するのにうってつけの材料をいつの間にか目前にぶら下げられた人々も少なくなかったのではないかとも思う。

果たしてここには如何なる命題が隠れているのか。

(1) 私たちは遺跡・遺産に何を付託するのか

私たちは自らを取り巻く環境をそのままに理解することはできない。私たちは、言語をはじめとして自らの内に育まれた機制によって、世界を分節し、再構成することで、環境を自らに対して意味あるものとして把握する。しかし、その分節や再構成の仕方は、それぞれである。それは、民族や文化、社会、集団、個人、そして、例えば個人にあっても、時と場合によって相当に異なるかも知れないほどに、である。分節も再構成の仕方もそれぞれの世界にあっては、概ね同じものを指していてもその理解は同様とは言えないのではないか。

「遺跡」や「遺産」は、そうした中で、あるいは、そうした世界の中にこそ存在しているのである。

その意味では、「遺産」のアセスメントは「環境」のアセスメント⁶⁾とは、別の相phaseにあると考えられる。

私たちがそれらを大切にしたいという気持ちはどこか

ら生じてきたのかということをときどき想像してみる。それは、しばしば強調されるように、何かを喪失して心的ダメージ（苦しい、悲しい、寂しい、残念な、がっかり、……）を蒙った経験、もしくは、そうした経験の伝承に対する或る種の共感から、再びそのことを繰り返したくないという防衛的な反応ではないのかと考えてみる。あるいは、それらを誇示するという行動の観点からは、或る社会的な枠組みにおいて競合する他のグループに対する優越性の意識的又は無意識的な顕示（欲）、もしくは、最も過激に表現するならば、直接的又は間接的な攻撃ということですらあるかも知れないなども考えてみる。

しかし、平和な日常にあっては、むしろ、その日常に組み込まれ、自らにある有形・無形の命との関わりが当たり前のものとなっていて、それを意識し、自覚することの容易でない、そういう存在であることが重要なメルクマールのひとつである場合もあるだろう。また、それは、保護すべきものというよりも、日常の根底を支えるものとして地域に息づいてきた暮らしそのものであり、その地域に生きていることを実感させるものであったりする。

例えば、2011年3月の東日本大震災という未曾有の大災害において、宮城県石巻市の雄勝町に受け継がれてきた法印神楽をめぐる人々の反応は、まちの復興に目処が立たない中でもその復活に情熱を注ぐというものであった⁷⁾。神楽を復活し、暮らしの中でその継承を絶やさないことが、地域の再生と将来に向けた大きな力となる。それは、壊滅的な打撃にあっても、その地域が悉く消滅してしまわない限りにおいて、ホメオスタティックに地域の命をその先に繋ぐ、そうしたポテンシャルを維持し続けるものの存在を如実に伺わせる事例と言える⁸⁾。

（2）増え続ける遺跡、溢れかえる（？）遺産

そうしたポテンシャルは、今日、「遺跡」として理解されている存在にも付託されている。そして、その「遺跡」の特質は、地域を構成する土地の一部を占めていることにある。今日に至るこの1世紀余りの経過の中で、私たちの社会は土地に刻まれた過去の痕跡を、「遺跡」として次から次へと発見してきた。いまや、それらを完全に視界から遠ざけて土地を触ることができないほどにである。

この度開催した研究集会における討論bの検討にもあったように、今日までの遺跡に対する取組は、その保護プロパーの立場からすれば、依然として課題が山積し、新たな問題も生じてきた中で万全とは言えないまでも、一定程度の実績と成果を挙げてきたと言える。一方、討論aにおいて取り上げられたホルトルフ氏のディベートにもあるように、現代ほど、社会の中に数々の遺跡が記載され、なお、さらに加速度的に増え続けている時代を私

たちはいままでに経験してきたことがあるだろうか⁹⁾。

特にこの10年来、いわゆる「世界遺産」をはじめとする種々の「遺産」的取組¹⁰⁾の熱狂振りに呼応するように、人々はほとんどあらゆる社会分野において、永く将来に受け継ぐべき「遺産」ということを過剰なほどに意識するようになってきてはいないだろうか¹¹⁾。

未来永劫受け継ぐことを企図してつくられたものも確かにあるとしても、それが即「遺産」ということではないようにも思われる。そして、近年において私たちが「遺産」と呼びたいものの多くは、この世界に存在し始めたそもそもから「遺産」となることを考慮し、加味してつくられたものではないものではないだろうか。

それらのうちには、今に至る結果として、永きに亘り、積極的な意図を以て受け継がれてきたものも少なくない。また、私たちは、今日まで築かれてきた文明的な社会の中に暮らす中で、なんとなく感じてきた或る種の歪みからの解放を願って、それを「遺産」に期待しているところもあるのかも知れない。あるいは、例えば、私たちの社会の行く末を思うとき、そして、予測できない将来に対する拠り所のひとつとして私たちの社会が歩んできた過去を振り返る中で、その時々生きる人々がそれらの意味するところの何か大切さを自らの社会に引きつけて思うからこそ、そこに「遺産」としての気付きが生じるのではないか。すなわち、現在を通過点として過去から未来へと流れゆく時の経過にあって、その来歴は過去に求めるとしても、私たちが何を「遺産」と感じるのかは、過去そのものというよりも、私たちの将来への意思との関わりにおいて、反応し、生じる何かと関連しているのではないかと思われるのである。

その「遺産」が不思議なほどに近頃の巷に溢れかえっているように見えるのは、なぜなのか。

時の経過と関連して、すでに動かしがたい過去を含む「遺産」にこれだけ縋り、それを広く認めさせようとする現状は、どうなるのか誰にも分からない将来の行方に対する何か漠然とした不安の深まり具合を示すバロメーターのひとつでもあるかも知れない。

（3）遺跡の意味、遺産としての表現

今日、「遺跡」の重要性を検討するとき、かつてこの世界を生きた歴史的な証拠や文化的な表徴を保存し、継承するという、いわば、学術的観点からのモチベーションが強調される。文化財保護法に基づく保護スキームにおいても、第一義的には、そのことを史跡指定の根拠として運用されており¹²⁾、指定に関わる説明文も歴史学的あるいは考古学的な術語で記載されることが定着している。

それらは、「歴史認識」という言葉にも含まれている

ように、今日における何らかの「歴史観」と照応するものとして意味を成すと考えられる。したがって、同じ過去のものであっても、その時々「歴史観」の埒外にあるものは意識され難く、場合によっては認識すらされないこともあろうと想像されるのである。しかし、その「歴史観」はいったいどのようなものなのか、それによって、「遺跡」をめぐる事態はまるで〈藪の中〉となる。

本書冒頭のグラビアにも窺えるように、社会の中で、私たちが「遺跡」と呼んでいる対象について、少し見方を変えながらパブリックとの関係を探てみると、私たちは、遺跡やそれに関わる遺物などが必ずしも、「歴史観」との照応で把握されているわけではないと感じる種々の場面を様々なかたちで経験する。

極端な言い方をすると、歴史的または考古学的な重要性、あるいは、それらのオーセンティックな保護上の重要性が、普遍的な価値と多くの部分で整合すると考えるのは、専門家と自称他称される人々に限られた特異な観点に過ぎないのではないかと、とも思ってみたりする。

土地に刻まれた過去の人々の活動の痕跡は、世界中、どこにでもある。それらをすべて「遺跡」と呼ぶならば、いったい、そのような「遺跡」を含む世界の客観的な存在としての成り立ちと、一部の「遺跡」を大切に感じている私たちが理解し得る（と少なからず思っている）合理性との間には、どのような関係があるのだろうか。それは、私たちが知ると知らずとに拘わらず実態として存在する「環境」と、私たちが意識するとしなとに拘わらず経験する「景観」との関係にも比せられる。

日々様々なエピソードの連鎖の中に生きる私たちにとって紛うこと無き明証性を有するのが、「環境」のような客観的な存在ではなく、「景観」と対するがごとき主観的な経験だとすれば、「遺跡」の意味を経験し、「遺産」としての価値を表現するのは、ほかならぬ「私たち」である。そして、「私たち」が或る「遺跡」を大切なものであるとする場合には、それを大切に思い感じるに至った「私たち」の経験、もしくはその経験のプロセスから得た意味にこそ価値の源泉があるのではないかと。

（４）遺跡・遺産の内容と価値の間にあるもの

しかし、ここに改めて言うまでも無く、この世界は、私たちが「私たち」と思う集団だけのものではない。

しかも、ここで「忘れてはならない」と強調したいのは、ここに言う「私たち」とはいったい誰のことなのか、ということである。「私たち」も様々なこと、すなわち、価値の根源を成す経験のプロセスは、千差万別であるということを、いつでも心に描いて置きたい。

その様々な「私たち」は、「遺跡」や「遺産」に接して、

果たして何を経験しているのだろうか。そして、「遺跡」や「遺産」は如何なる経験に晒されているのか。その内容は、「遺跡」や「遺産」と呼ばれている対象そのものではなく、それらと「私たち」との間に生じる関係にこそ息衝いているものであり、そうであればこそ、その経験はそれぞれの「私たち」にとって意味のある内容となる。

一方、グローバル化が進み、価値やその水準の共有が優占してきた今日では、価値スキームの統合が図られる傾向にあるように思われる。そこでは、或る対象に関する価値集団の離合集散が繰り返されるものの、「格差」という表現がそれを象徴するように、やがて世界はひとつのものとして、多様な価値体系の存在はうやむやにされ、majorityが悉くminorityを席卷して或る価値舞台に引き摺り出す。特に近頃、線形な価値観¹³⁾に収束させるように誘導するそうした力が、充満してはいないだろうか。いまや、私たちの目に付いたあらゆるものは、いわば、或るゲームの舞台へと否応無く引き摺り出される対象として、場合によっては、蹂躪されることとなる。そして、蹂躪に違わなかった場合には、疎外されたりもする。

例えば、ユニバーサルの名の下に、どこに行っても同じサービスを受けることができるようになるべきだとか、できるはずだとか考える。そして、それが果たせないことが知られるや、非難的となって公共の良心から集中砲火を浴びることもしばしばである。翻って、私たちが「遺産」について検討するとき、〈遺産を保護する〉という論調は、ややもすると、「遺産」を蔑ろにしようとする敵を見付けようとして、それが見付けにくい場合には、仮想敵を生み出してまでも、それに向けての批判や非難をすることで、その保護の正当性を強調する、そうしたことに陥る恐れと背中合わせであるかも知れない。

そこでさらに思うのは、「私たち」は、様々な「私たち」に対して、〈価値〉を翳して、その平和的な共有の名の下に、遺産に対する行儀や姿勢まで縛ってはいないかということである。何か、それは、意図しない説得や善意の擦し付けになってはいないか、と心配してみたい。

「遺跡」や「遺産」と言って、将来に受け継ぐべきと主張されるものの多くは、必ずしも文化財的な意味で把握されているものではない¹⁴⁾。むしろ、「遺跡」の内容も「遺産」の価値も、それぞれの「私たち」にとって意味を成すコンテクストに無ければ、認識すら生じえない。ましてや、遺跡・遺産に対するそれぞれの態度が文化財的でないからと言って軽んじたりすることは厳に慎むべきであるし、さらには、その態度を直感して経験できないからといって、その態度の意味を感じることを諦めることは、到底、有り得べきことではないと考える。

それぞれの“私たち”にとって、遺跡・遺産の内容や価値の意味するところが違う場合に、まず取り組むべきは、相異そのものの是正とか、統一とかではなく、違う内容や価値とその背後に在る体系に関する探究であり、その間にあるそれぞれの意味を見極めることである¹⁵⁾。

当然、その視線は、私たちが知らず知らずのうちに経験している前提にも向けられて然るべきである。

3. 文化財は（いかなる意味で）大切なのか

そこで、「文化財は大切」ということを疑ってみたい。

こう表現することが、かなり挑発的である、または、敵対的であるとの印象を提供するとすれば、やや誤解の範囲を狭めるために、もう少し言葉を補うことにして、「文化財（遺産）だから大切」というフレーズ、あるいは、そこに含まれる命題を改めて考えてみたい。なぜなら、依然としてそのことに弁別的な意味を感じない立場は、少なからずありうるからである。

（1）お墨付きとしての「文化財」や「遺産」

そもそも「遺跡」を含む「文化財」や「遺産（文化遺産・自然遺産）」とは、或る対象の集合を表す抽象的概念としての造語である。しかも、今日、定着している「文化財」の用語は、法律等に基づく保護制度との照応においてよく普及していると言ってよい。端的に言って、それは、大方、何らかの権威を以てオーソライズされる対象として理解されているように思われる。

普通に考えて、私たちの多くは、例えば、文化財保護法に基づき史跡に指定された遺跡について、あるいは、世界遺産条約に基づき世界遺産一覧表に登録された遺産について、何か、価値が上がった印象を受けないだろうか。そして、何か、権威を裏付ける国や世界がお墨付きを与える感触を暗黙のうちに得てはいないだろうか¹⁶⁾。

本来、大切にしたいものを、「文化財」（あるいは、特に近年では「遺産」）と名付けた集合に含め、それらに包括的な視線を投じるスキームであるはずなのに、いつの間にか、世の中に「文化財」と「非・文化財」との区別を生み出し、結果として、「文化財」としてオーソライズされていないものは大切ではないかのような雰囲気、何となく醸成されたりしてはいないだろうか¹⁷⁾。

半世紀以上にわたって国内外を席卷してきた「文化財」や「遺産」という言葉は、もはやレッテル¹⁸⁾のごとき顕示効果をもたらす何かであるように感じられる。いわば、品質の認証として、そのレッテルはこぞって求められ、そのことによってさらに価値を上げる有価証券のごとき性質をも帯びてきたとも言える。しかし、しばしば実態の意味を置き去りにして、本体よりもそのレッテル

の方が大切にされる傾向をも指摘できるかも知れない。

加えて、近年、様々な銘柄が上場されて市場は飽和気味となり、やや値崩れを起こしつつある気配さえ窺えないか。あるいは、規制を嫌って如何にそのレッテルが貼られないようにするかということに傾注したり、他方では、そのレッテルを転用して稼ごうとしたりして、事態は極めて複雑である。レッテルそのものにも多様な意味が添加されている現状は、いまやそのトレンドの全体を追うのが容易ではないほどに活況を呈している。

それほどの人気を博しているにも拘わらず、それらは、どうも世間では空気や水ほどに不可欠とは感じられていないようである。そのことは、研究集会の討論bにおいても悩ましい命題として取り上げられた。

（2）空気や水でなければ、何なのか

そうした、悩みを受け止めつつ、私たちの暮らしの中でそれに相当するのは何かと比喩的に考えてみたところ、毎日欠かせないものの中から、ふと、実は〈衣服〉のような存在ではないかとの着想を得た。それは、空気や水のように、生物としての私たちの生命を維持する上でなくてはならないものではないが、文明社会に暮らす私たちにとってはほとんど欠くことができないものである。

そして、それは、確実に私たちの日常のエピソードとともにあって、ともに経験を刻むものである。さらにそれは、私たちを様々な帰属させ、自らの色々な好みとともに、内外から認識される私たちの一部をも成している。竟には役割を終えて、或いは捨てられたり、或いは大事に仕舞われたり、或いは人に受け継がれたりする。

〈衣服〉を着用していなければ、当然、真っ裸になる。それは、私たちが日常社会で暮らしていく上では、かなり困ったことであるということに同意しない人はほとんどいないであろう。しかし、それはいつでも顕現して必要を意識されることではない。さらには、私たちの暮らしの中で、私たちと〈衣服〉との関係に相当するものは、「文化財」や「遺産」ばかりではないとも思われる。

一方で、例えば、「文化財」や「遺産」というレッテルは、むしろスポイルされる方向に作用して、いつでも礼服や正装でなければならないかのように印象付いていないか。もちろん、古美術に象徴されるような類の「文化財」は、そのイメージが合うだろうし、すべからくすべての「遺跡」や「遺産」は一品物として、そういう性質をも帯びているかも知れない。また、この比喩のミソは、何気なく繰り返し着ていた〈衣服〉が、いつの間にか、経験に基づく記憶とともに、とても大切なものとなるということとも思われる。何気なく手に入れた〈衣服〉でも、着る人の暮らしによって、そこには、様々な意味

がア・ポステリオリ [a posteriori] に添加されていく。

遺跡や遺産も、ふと気が付けば、私たちが暮らす地域の装いの一部となっている、そういうものかも知れない。

4. 経験と意味、そして、パブリック

風土も来歴も異なる地域の装いはそれぞれである。

そして、地域における人々の営みもそれぞれである。

私たちはもっと想像力を働かせなければならない。

そのカギは、それぞれの〈経験〉と〈意味〉である。

合意形成ということと関連するパブリックには、或る種の公平性が関係するものと思われるが、しかし、それは均質化を指向すべきものではない。なぜならば、多様な価値観の間に生じる交渉やそれに伴う葛藤の経験にこそ、自らにおける意味の気付きの契機があるからである。

問題なのは、差異そのものではなく、差異によって生じる違和感である。私たちはそうした違和感をよく観察して、その取扱いの調整に取り組まなければならない。

地域における遺跡・遺産のマネジメントにおいては、様々な違和感の取扱いの多角的な調整のために、地域に育まれてきた具体的な経験や意味に応じたプランとシステムをそれぞれに創造していく必要があると考える。

【註】

- 1) このとき、多くは12月21日としていて、一方、計算方法の違いによって実は23日であるとか、あるいは冬至付近の21日から23日までなどとする情報も見られた。しかし、12月21日に対する反応は極めて強力で、例えば、NASA: National Aeronautics and Space Administration; アメリカ航空宇宙局)は、You Tube上に配信するSCIENCE@NASAにおいて、“The World Didn't End Yesterday” (Science Casts: Why the World Didn't End Yesterday: 再生時間4分21秒)を2012年12月11日に提供し、一部に騒がれた社会的混乱に対する自らの態度を広く公表した。このプログラムは、本稿執筆時に於いて他のプログラムの再生回数(3万回程度のものから、極めて多いものでも80万回程度)を遥かに凌ぎ、370万回以上再生されているもので、その最初のメッセージには、‘NASA is so sure the world won't come to an end on Dec. 21, 2012, that they already released a video for the day after.’とあり、科学的な見地から2012年12月21日がいかに地球最後の日ではあり得ないかを解説し、強力に主張している。さらに、世界180か国で850万人もの読者を有するというNATIONAL GEOGRAPHICにおいても、「マヤ文明と終末論の真実」あるいは「マヤ文明と世界滅亡の真実」と題するWeb連載や番組配信をするほどに関心を高めた。
- 2) 一説にフィラエのイシス神殿をめぐる、この場所が閉鎖されれば、毎年秋分の日に、壁面に描かれた1465体の神像の加護がひとつずつ失われ、全ての神々が去った年の秋分の日に世界が水没するという滅亡伝説というものもあるようで、神殿が閉鎖されたのが550年と伝えられていることから、爾来1465年を経過することになる2015年の秋分の日がこれに相当するとのことで、マヤ暦の計算間違いとよく照合するとの話もある。斯くも古代の遺跡には、滅亡に関わるメッセージが込められているとは神秘的であり、まさに伝説的である。
- 3) むしろ、「情報」という液体から成る「海」とでも表現したほうが適当ではないかとすら感じられる。さらに悪乗りすれば、すでに世界は情報の海に沈みつつあるかも知れない。
- 4) Warner Bros. Entertainment, Incが1999年3月に配給した

- “The Matrix” (邦題『マトリックス』)などに代表されるように、今日、コンピュータによって創り出された仮想現実と私たちの意識(世界認識)との関係の検討を含んだアイデアは、特にSF映画ではこのところホットなテーマであり続けているし、さらには一部のサイコホラー／サスペンス系映画においても、私たちが日常に期待する常識と世界観を次々と打ち破っている。ちなみに、マヤ暦の今日的解釈との関連で人類滅亡のイメージをリアルに描いたものとして、Columbia Picturesが2009年11月に配給した映画“2012”がある。この映画では、太陽活動の異常な活発化に伴う地殻変動によって地球上の大地の多くが失われる中、ノア方舟(ark)にも比せられる最新鋭の巨大船によってわずかな人々が生き残り、逆に隆起してほとんど唯一残されたアフリカ大陸の南端にある喜望峯(Cape of Good Hope)に向かうところで物語は終わる。信じがたい迫力で描かれる精緻なコンピュータ・グラフィクスと或る種痛快なアクションによって極めてインパクトある仕上がりとなったこの映画は、筋書きの具体はともかくとしても、文明社会の破滅の中で深まる思いやり(to be cared for each other)と和解、融和を主題としている。世界滅亡の象徴的場面においては、コルコバードの丘に建つ巨大な救世主キリスト像(Cristo Redentor)や、終末に当たって多くの人が祈りを捧げているヴァチカンの大聖堂など、各地に所在し、今日の世界観の中で幅を利かせている、いわゆる「遺産」が脆くも崩れ去る描写があって、いずれ今回の研究集会の主題である遺跡・遺産のほとんどすべては消滅したであろうと容易に想像されるほどであるが、その一方で、主人公のひとりが携えていた無名作家(彼も主人公のひとりであるが)の著作による1冊の本が、これから受け継がれる遺産(台詞ではlegacyと表現されている。)になると語られるシーンなどもある。人間が地上に築き上げてきたほとんどのモノが失われ、世界中のほとんどの人々が絶えてゆくその日であっても、「文化は我々の魂にある、簡単には死なない」(Our culture is our soul, and that's not dying tonight.)という台詞が口にされることに象徴されるように、人と人との心の中に受け継ぐものの将来への確信たる希望がとても大切なものとして表現されたりもしている。ちなみにlegacyは、過去に生じた出来事や行動などに起因して現在に存在している状況や事態、境遇、場面などを意味する。
- 5) もっとも、むしろ様々な遺跡や遺物からもたらされてきた表徴のイメージから、マヤ文明の超常的であることを世界中の多くの人が期待しているのかも知れないとも思われる。さらに付け加えれば、例えば、マヤ暦が予言的であるとするならば、普通に考えるに、来るべき世界の変貌と自らの民族の運命との関係に最も高い興味が払われるのが常套であると思われるし、今日に至る世界が様々な経験してきたパラダイムシフトをも含んだ意思表示となるものと考えられる。
 - 6) 例えば、原科(2011) p33によると、環境アセスメント(EIA: Environmental Impact Assessment)は、人間行為が環境に与える影響を事前に予測・評価して、環境と調和した行為と与えるような意思決定を支援するものである。
 - 7) 復興を目指す雄勝法印神楽をめぐる取組については、<http://www.geocities.jp/hoinkagura/>などを参照のこと。
 - 8) こうしたことの重要な関連では、例えば、国際交流基金HP「アーティストインタビュー 東日本大震災から1年余り心を支える民俗芸能」(阿部武司／東北文化財映像研究所) http://performingarts.jp/J/art_interview/1206/1.htmlなどを参照のこと。また、このインタビュー記事において紹介されている「asapro無形文化財映像ライブラリー」については、<http://www.youtube.com/user/asaproabe/feed>を参照のこと。
 - 9) 例えば、「埋蔵文化財関係統計資料」(文化庁文化財部記念物課、平成25年3月; 2013, 33pp)によれば、日本において、平成24年3月現在の「周知の埋蔵文化財包蔵地」は46万5千件余りとされている(※ただし、複合遺跡などの数え方によって統計上の数字は幾分か異なる)。また、奈良文化財研究所がそのHP上に公開している「遺跡データベース」<http://mokuren.nabunken.go.jp/Iseki/index.html>においてもほぼ同様のオーダーでのカウントを示している。
 - 10) ここでいちいちwebsiteなどを参照して例示するにしても、いずれ、どのような範囲と視点で取り上げるべきかを判断しかねるほどに、様々な公的機関、プライベートセクター、あ

るいは、個人によって、膨大な「遺産」又は「遺産的」なもののカテゴリーやリストを見つけることができる。「遺産」として取り上げられているこうした様々な対象は、すでに一つの体系として説明するのは不可能と言ってもよく、それゆえに、「遺産」という言葉の定義を検討することすら虚しい状況にあるとすら思われる。

- 11) もっとも、それは、何か特に取沙汰して、さらには選別される、そのこと自体に対する興奮なのかも知れない。
- 12) 例えば、日本の文化財保護法下における指定文化財としての「史跡」については、その母集団を「貝塚、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡で我が国にとつて歴史上又は学術上価値の高いもの」(文化財保護法第2条第1項第4号)とし、そのうちから「我が国の歴史の正しい理解のために欠くことができず、かつ、その遺跡の規模、遺構、出土遺物等において、学術上価値あるもの」(特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準 史跡の部)との観点に基づき、その指定の適否を検討することとなっている。
- 13) linear sense of valuesとでもいうべきか、ここでは、単純な意味合いで、優劣を数直線上の数字に置き換えて比較するような価値観のことをいう。コンピュータゲームにおけるHP (hit point又はhealth point)、Level、ライフ (Life) などの表現はこの意味で象徴的と言える。
- 14) 例えば、「高松塚古墳の壁面の劣化」問題や「旧石器遺跡の捏造」問題に反応した社会の雰囲気は、大方、その文化財としての意味合いというよりも、むしろ、なにかそこに含まれるスキャンダルのコンテクストに対する反応ではなかったか。
- 15) 自分たちにあまり「意味」が無いものが、誰にとっても「価値」が無いと考えるのは、論理的に考えても明らかに誤りである。私たちが「遺産」に感じる「価値」とは「内容」の把握に基づく「意味」の総体的な関係によって生じるものと考えられるので、所与の(ア・プリオリ [a priori] な、すなわち、「経験」に依存しない)ものとしては存在し得ないと言える。
- 16) 対象とする案件の特定について、文化財保護法においては、それぞれの類型に応じて指定・認定・選定・登録、あるいは、これらに関連して地方公共団体からの意見具申や申出というスキームがあり、また、世界遺産条約においては、締約国からの推薦 nomination に基づく登録inscriptionというスキームがある。最近では、これらの制度について正確な理解が普及してきたようにも思われるが、しかし、依然として、文化財保護法においては日本国政府が、あるいは、世界遺産条約においては世界を包摂する組織である(と想像されている)国際連合のユネスコが、「指定」しているとの理解によって、価値が上がったという印象が強いかも知れない。ちなみに、世界遺産条約第12条では、一覧表に記載されることによって生じる具体的な効果は別として、それ以外の点で顕著な普遍的価値を有しないという意味に解してはならない、としているものの、全体的な印象としては、登録されていない遺産は、登録されている遺産より価値が低めに査定されている傾向にあると言わざるを得ない状況にあるものと感じられる。
- 17) このような弁別指向は、世界遺産における「代表性」representativityや「比較研究」comparative studyにも或る種の影を落としている。すなわち、他のもので代表されるということを、専らその観点から付き詰めていったときに、一体何が起ころのかと言えば、極端な話、その代表だけ残せばよいという意見が生じたり、そうではなくとも、代表以外のものの価値はやはり何となく軽んじられたりするかも知れない。もともと代表性は、他のものを貶めるためではなく、それに代表されるのと同様の特質を、普遍的に大切にしようというキャンペーンの下にあるべきである。そうすることで、似たような思いを共有する(または、共有し得ると考えられる)同胞たちは、類似と相違を同時に認め合い、協働し、お互いの気持ちを高め合うことができると思われる。あるいは、比較研究においては、類例が無いことを強調する余り、その趣旨はしばしば脱線する傾向を窺うことができる。比較研究が有する真に重要な目的は、自らが大切に思う遺産について、様々なコンテクストと比較することにより、隠れた次元にあるメルクマールに気付きを得ることにあると言える。
- 18) レッテルとは、あまり良い印象の言葉ではないかも知れないが、それは、断定的評価であり、老舗の商標のようなものであり、信用に基づく品質を保証するものと言える。

【参考文献】

- * 奈良文化財研究所文化遺産部遺跡整備研究室編 (2011):『地域における遺跡の総合的マネジメント—平成22年度遺跡整備・活用研究会(第5回)報告書—』;独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所, 137pp
※<http://www.nabunken.go.jp/org/bunka/pdf/site-sympo2011.pdf>
- * 奈良文化財研究所文化遺産部遺跡整備研究室編 (2012):『自然的文化財のマネジメント—平成23年度遺跡等マネジメント研究会(第1回)報告書—』;独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所, 159pp
※<http://www.nabunken.go.jp/org/bunka/pdf/site-sympo2012.pdf>
- * 日本遺跡学会編 (2011):小特集「東日本大震災と文化遺産」;遺跡学研究、第8号, p.p.186-204
- * 日本遺跡学会編 (2012):特集2「災害／文化遺産／地域」;遺跡学研究、第9号, p.p.95-217
- * 原科幸彦 (2011):『環境アセスメントとは何か——対応から戦略へ』;岩波新書1301, 岩波書店, 210pp
- * 平澤毅 (2007):文化遺産としての遺跡・庭園・公園の概念に関する比較考察;遺跡学研究, 第4号, p.p.179-190
- * 平澤毅 (2007):「遺産」ということ;遺跡学研究, 第4号, p.44
- * 平澤毅 (2011):奈良時代までの庭園——平安時代庭園検討の前提として—;奈良文化財研究所 (2011)『平安時代庭園の研究—古代庭園研究II』(奈良文化財研究所学報第86冊, 研究論集17, 293pp), 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所, p.p.9-39
- * 平澤毅 (2013):遺構露出展示のマネジメント—「遺構露出展示に関する調査研究」について—;『遺構露出展示に関する調査研究報告書』, 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所, p.p.4-13
- * 平澤毅 (2013):日本遺跡学会の10年—設立／大会／『遺跡学研究』—;遺跡学研究, 第10号, p.p.68-95
- * 三浦展 (2004):『ファスト風土化する日本 郊外化とその病理』;新書y 119, 洋泉社, 221pp
- * エドワード・ホール 著／日高敏隆・佐藤信行 共訳 (1970):『かくれた次元』;みすず書房, 270pp (HALL, Edward T., THE HIDDEN DIMENSION, ©Doubleday & Company, Inc., New York, 1966)
- * クロード・レヴィ＝ストロース 著／荒川幾男 訳 (1970):『人種と歴史』;みすず書房, 116pp (LÉVI-STRAUSS, Claude, RACE ET HISTOIRE, ©UNESCO, 1952)
- * R. D. レイン 著／笠原嘉・塚本嘉壽 共訳 (1973):『経験の政治学』;みすず書房, 214pp (LAING, R. D., THE POLOITICS OF EXPERIENCE and THE BIRD OF PARADISE, ©Penguin Books, Middlesex, 1967)

Abstract: When considering the management of historical / archaeological sites cultural heritage as public entities, we are facing-prone consciousness in value and the contents of them. However, in this paper, I would like to note the source in understanding them as our “experience” and “meanings”. We do not need to be struggling to share the value and content between wide varieties of stakeholders. It is rather than that, re-examine firmly the existence different from each other as “experience” and “meaning” should continue to cherish the differences. Do not seized with a label such as “cultural property” and such as “heritage” in the sense that some sort of authority to certify, we would like to build a relationship with them as if the relationship with the parts of “clothes” for us to ware in our lives. That’s because there are any opportunity for awareness of a meanings, so much in each experience of the interchange and conflict that occurs between the diverse senses of values of us who wore the respective “clothes”. Then, instead of the difference in each of the “clothing”, with a view to adjusting the discomfort caused from the differences, we should create various multi-dimensional sight concerning management plan and system adapted to each region.

コラム 遺跡と盗掘とパブリック

カンボジアのある村落での話である。

村人が、畑で農作業をしていたら、鍬の先端に何かがあつた。腰をかかめ、土のなかを探ると、一粒の水晶のようなものだった。ポケットにいれて農作業を続けると、また鍬が何かにあたる音がする。水晶では、と期待し、座り込んで土を探る。いくらか慎重に探っていくと、そこに現れたのは、一粒の黄金だった。話は村中を駆け巡り、村人は、各自の畑を掘り返す。すると、多くの水晶、色とりどりのガラス玉、鉄器、そして黄金がでてきた場所がいくつかあった。話は、近隣の村にも伝わり、人々が村へ押しかける。そして、それが国内メディアに伝わり報道されると、今度は国中から人々が鍬をもち、村へと押し寄せた。月日が過ぎて村は、穴ばかりの村となっていた。少しフィクションも入っているが、これが数年前にカンボジアであった話である。

フランスの植民地支配から1953年に完全独立を果たしたカンボジアは、1970年代から内戦に突入した。ポル・ポト政権による支配と虐殺、ベトナム軍進駐と東西冷戦の影響で、カンボジアが国際社会に復帰したのは、1991年にパリ和平協定が結ばれて以降である。国際社会の関心をまず集めたのは、アンコール・ワットで知られるアンコール遺跡群の保存であった。アンコール遺跡群は1992年にUNESCO(国連教育科学文化機関)の世界遺産リストに世界文化遺産として登録され、その保存状況から、同時に危機遺産としても登録された。UNTAC(国連カンボジア暫定統治機構)の管理下で実施された総選挙により、1993年に新生カンボジア王国が成立してからも、文化遺産の支援は比較的治安の安定したアンコール遺跡群に集中し、カンボジア国内に散在する遺跡群の保存・管理には至らなかった。結果、国境沿いの密林に埋れた遺跡群から運びやすい彫像等が盗まれ、世界へと流出した。タイとの国境近くに位置するバンテアイ・チュマル遺跡¹⁾からは、1999年に数トンにおよぶ浮き彫りが持ち出され、タイ国境で取り押さえられている。近年では、治安の安定化に伴い地方の遺跡に徐々に注意が払われる一方で、新たに問題となり始めたのが、埋蔵文化財の盗掘である。

冒頭のような話で有名となったのは、プレイベン州に位置するビットメアス(Bit Meas)という村である。2006年5月に情報を得た王立芸術大学考古学部(以下、芸大)のメンバーが村を訪れた時には、既に村の土地の多くが盗掘された後だった。といっても、集まってきた人々に「盗掘」という考えはない。村人は、ただ自分たちの田畑を掘ったら黄金やビーズが出てきただけの話であり、それを売ったところ現金となり、さらに噂を聞いてやって来た人々の希望で自分たちの土地を貸与しただけである。

2007年4月にスヴァイリエン州(プレイベン州の隣)で調査をしていた芸大とメモットセンター²⁾は、ビットメアス村の近くのプロヒア村の盗掘ニュースを聞く。ただちに現場へ芸大チームがむかい、急遽芸大とメモットセンターは、プロヒア村での発掘に乗り出すことになった。しかし、資金、土地の交渉、調査許可などの問題で、実際に発掘が開始され

たのは、2007年末のことである。既にその時には村の多くが掘られた後であった。発掘調査が始まると、当初村人達には自分たちの村にあるものが、略奪されるのではないかという恐れがあったという。しかし、発掘と村人への説明が進むにつれ、村人は徐々に発掘に理解を示し、以前どこで何を掘り当てたかというような情報を徐々に調査隊へ報告するようになった。発掘調査の成果は英語とカンボジア語でまとめられ、調査で新たに発見された墳墓は52基におよぶ(一方で、村で以前に盗掘された墳墓は約1000基ともいわれる)。紀元前4～紀元後1世紀のものと考えられる銅鼓、黄金、鉄製品、ビーズなどは、実測、分析、保存処理後にプノンベン王立博物館において展示され、そのいくつかは現在村で展示されている。

一方、2010年初頭、カンボジア文化芸術省は、新たに、古都ロンヴェーク³⁾の北西15kmに位置するクラン・コー村での盗掘情報入手する。文化芸術省は、奈良文化財研究所に協力を依頼し、研究所は2010年から2012年の3年間は、文化庁文化遺産貢献事業(文化遺産国際協力拠点交流事業)として、カンボジア人考古学者への人材育成としてクラン・コーのみではなく、歴史的に関係の深いロンヴェーク、ウドンも含めた調査と研修が実施された。結果、2011年7月のクラン・コーでの調査では、未盗掘の墓葬1基が検出されている。クラン・コーは、目立つような墳丘や環壕跡がみられるわけではなく、村人からの報告なくしては、発見はなかったと思われる。一部の村人による盗掘が既に行われていたが、出てきた多くは14～16世紀を中心とした陶磁器類であり、ビットメアスやプロヒアとは違い、黄金やビーズなどは報告されなかった。調査に入り、気づいたのは、クラン・コーは、首都郊外の工業地帯のひとつとして開発されている国道5号線沿いから近い村落であるため、この数年の間に新しく建ち始めた靴生産工場、ビール工場等へ村の若い男女が働きに行っている状態であったことである。また、村では男性がプノンベンへ出稼ぎに行くこともよく見られる。この村とプロヒアの大きな違いとしては、村人が2009年頃から建設され始めた工場で働くことで、既にある程度の現金収入があったこと、村で出土した遺物が比較的現金化するにあたって判定が難しい陶磁器を中心としたポスト・アンコール期のものであったことがあげられる。

カンボジア国内の状況を受けて、2009年ICOM(国際博物館会議)は、カンボジア文化芸術省とともに、石、鉄製品、陶磁器にいたるまで、どのようなものが不正に流出する文化財に相当するのか、石造から陶磁器までその特徴をしたカンボジア古美術リストの冊子を作成し、普及を試みている。また、早い時期から、カンボジアの埋蔵文化財盗掘を懸念し、文化芸術省を支援する団体に、2003年に設立されたヘリテージ・ウォッチ⁴⁾がある。彼らは、村人に対する盗掘防止のための文化遺産教育を積極的におこなってきた。彼らによって作成され配布された絵本(写真)は、町からきた盗掘目当ての男に唆された村の若者が、村の長老や僧侶がいかに自分たちの歴史は素晴らしいか、先祖の遺産を守ることは義務で



ヘリテージ・ウォッチ配布の絵本表紙

あると論じたにも関わらず、盗掘をおこなった結果、わずかな現金しか得られず、しかも夜な夜な現れる墓の亡霊に悩まされるという話である。亡霊によって改心した彼らは、自分たちの盗掘を真似て盗掘を始めた人びとを止めるため、ロンヴェークの都がアユタヤ軍に攻められた時、人びとが欲を出したが故に、結局最後は都が陥落した、と話す。そして、わずかな現金に目がくらんで全てをなくすよりは、自分たちの先祖の遺産を守る事で、観光客が村を訪れ、その観光客が継続的に現金を落としていくことが将来的な利益になる、と論ず。欲に目がくらんだが故にロンヴェークが陥落した話は、カンボジアでよく語られる昔話であり、村人にとっても馴染み深い。また、カンボジアでは亡霊を信じる人も多く、なかなか文化的に考慮された内容の教材となっている。

遺跡はパブリックなもの、そして国の財である、という前提において、文化財の不法取引や盗掘を取り締まる法律は存在している。しかし、当然状況は社会や文化によって異なってくる。プロヒア村での事例は、土地を耕していたら、たまたま現金になるアルミ缶が出てきた、というのと同じ感覚である。実際プロヒアで出土した銅鼓は、キロ単位数ドルで通常の銅と同じ計算で売られていた。しかし、物質としての価値を越え、そこに歴史的価値や文化的価値がつけられた時、それは物を売る行為から、盗掘という犯罪行為となる。

カンボジアは現在その価値に対する理解が普及する過程にあるが、これまでの事例から考えると、その過程で求められるのは、頭ごなしの否定や禁止ではなく、何故残さなければならないのか、という問いかけに対する答えであろう。

(田代亜紀子／奈良文化財研究所)

- 1) カンボジア西部バンテアイ・ミアンチェイ州に位置する12～13世紀建立のアンコール王朝期の遺跡
- 2) 1999年にドイツ政府の支援で設立されたカンボジアの先史時代を研究するセンター
- 3) 現在の首都プノンベン北西約50キロに位置する16世紀の都
- 4) <http://www.heritagewatchinternational.org>